

私には生まれながらに体の機能に障がいがある友達がいる。彼女はとても優しく、笑顔が素敵で、思っていることはちゃんと伝えてくれる私の大切な友達だ。

多くの人が「障がい」と聞いてパツと思いつくのは、視覚や聴覚、内部障がいのことだったり、肢体不自由であることかもしれない。では、そもそも「障がい」とは何か。「障がい」とは、「物事の達成や進行の妨げとなること。また、妨げとなるもののこと」と辞書に書いてあった。

確かに、私の友達は、歩くときは体重をかけられるように両手に登山用の杖を握っていて、階段の上り下りをするときには手すりが必要だ。だから彼女はその場その場において、自分が動きやすいように自ら工夫している。私は、彼女の工夫を最大限に生かせるように、移動するときの荷物を持ったり、人が少ない時に一緒に移動したりとサポートをする。

「障がい」が「物事の達成や進行の妨げ」であるということは、背が高くて低い椅子に座ると腰が痛くなることも、背が低くて高いところにあるものに手が届かないことも。人と話すのが好きで長時間沈黙の場に耐えられないことも、人と話すのが苦手なグループ活動が上手くできないことも、これらは全て「障がい」であるということだ。このことを考えると、この世界に「障がい」がない人はいないのではないかと私は思う。でもその「障がい」は生きていく上でのただの「害」ではなく「個性」であると思う。そしてその「個性」は一人一人違うものである。ということは、「個性」はその人の「特別」なものであると思う。その時分の「特別」なものをどのように活用していくかで、その人の生き方が変わってくると私は考える。

中学校を卒業し、一週間がたった頃、離退任されるお世話になった先生方に挨拶をしに行こうと、私と障がいがある彼女と、仲のいい二人の友達、計四人で中学校に行くことになった。今まで障がいのある彼女は、家から中学校が遠いため、学校の行き帰りは車で送り迎えをしてもらっていた。だから私たちは彼女と通学路を並んで歩いたことがなかった。高校に進学するにあたり、彼女は電動車いすを購入したという。私たちは彼女の練習も兼ねて中学校までみんなで歩いて行くことにした。ルートを話し合いながらワクワクした。

「四人で歩ける」

そう思っただけで、幸せな気持ちになった。きっとこの道なら大丈夫だと皆が思った。ところが、実際にその道を歩いてみると、段差が多かったり、坂があったりして電動車いすではとても走りにくい道だった。私が何てことなく歩く段差や坂であっても、車いすの人から見れば、それを乗り越えるのはとても大変なことだということを、私は初めて知った。本当に私たちは想像の中で「負荷がかからない道」を選んだ「つもり」だったのだ。

中学校からの帰りは、行きで気付いたことを考え、話し合い、別ルートを選んだ。途中でルート変更もした。行きよりも時間がかかったかもしれないが、帰りの方が「スムーズ」だった。そして思った。最初は上手くいかずにごめんねという気持ちになったが、彼女を含めて四人で話し合い、工夫した時間が楽しく、それぞれの立場や考え方のアイデアが溢れていた時間だった。と。

私がこの体験を通して学んだことは、「自分」を含め「障がい」を持ったみんなが生活しやすい社会を、環境を、みんなで作り上げていくことが大切だということだ。何を「障がい」と感じるかは、百人いれば百通りあるはずだ。その障がいを上手くクリアして生きやすくするために、本人が声を上げやすく、また、周囲も共に考えて動く。決して本人一人が頑張る事でも、周囲がこうしてあげたらいいんじゃないかと本人を置き去りにして「してあげる」ことでもない。みんなで作り上げていこうという意識が、共に歩もうとする意識が、「障がい」があっても生きやすい社会にしていけると思う。